

## PL 救急医学，この未知なる世界から拓かれた未来へ



関西医科大学救急医学講座

中谷 壽男

救急医療は面白い。救命救急医療は、何が起きているのか判らない状況で緊急・応急処置や治療を開始しなければならない。この点、診断がついてから治療を開始する他科の診療とは大いに異なる。それ故に、病態が判らない場合が多い。病態が判って治療を行うのは、敷かれたレールの上を走るだけ、基本練習問題を繰り返すだけで、興味は継続しない。好奇心旺盛な若い救急医に取って、未知の病態を究明しつつ患者の治療に当たるのは、応用問題を解くがごとく興味のそそられるところである。自分たちの処置が、直接に患者の救命に繋がる場合には、大いなる達成感に満たされる。

救急医は忙しい。なかでも救命医は、とりわけそうである。眼前の診療行為や、その普及・標準化のための教育にも忙しい。災害が起きれば、なおさらである。しかし、重症患者の未知なる病態の間近に居るのも救急医である。救急医がその病態解明に取り組もうとしなければ、宝は流れ去ってしまう。救急医には少なくとも未知の病態、宝の発掘に取りかかる責任がある。宝に手を伸ばさぬは、勿体ない。

私が外科医から救急医学の世界に転じたとき、興味津々たる未知なる病態の多きに驚くとともに、大変興味深く感じた。毎日、毎日、自分の知らないこと、判らないことが多かった。自分が知らないだけであって、勉強さえすれば解き明かされる病態も多く、興味深い日々であった。しかし、それだけでは説明のつかぬ、得体の知れない未知なる病態も多くあった。残念ながらその多くは、未解明のままで残っている。しかし一方で、自分で納得できる説明に達したものもある。しかし、その謎解きは、一朝一夕に浮かび上がったものでは無い。常にリサーチマインドを持ち、“なぜ”という疑問を抱く。小さな“なぜ”の積み重ねが、難しい病態の解明に繋がることもある。自らの研究生生活の体験を紹介し、若き救急医の皆さんに、未知なる世界を拓いていただくための契機づけとなれば幸いである。救急医療の世界には、まだまだ未開拓の、磨けば光る宝が転がっている。